

サビエル生誕五百年

巡礼の道

41

藤屋 侃士
(下松市幸ヶ丘)



最果ての大聖堂

ポルトガルのロカ岬は、ユーラシア大陸の最西端。詩人カモンエスは「地ここに果て、海始まると詠んだ。

ロカ岬にはわずかに及ばないが、スペイン最西端のフィニステレ岬も「大地の終わるところ」と言われる最果ての地である。

その近くに教会が建てられた。
（聖ヤコブの墓）
キリストの十二使徒の一人であるヤコブはキリスト昇天後、スペイン宣教に赴く。しばらくして再びパレスチナへ帰るが、紀元四四年、ヘロデ大王の孫アグリッパ

パス王に首を切られて殉教した。

遺体は二人の弟子によつてスペイン北部に運ばれて埋葬されたと伝えられていたが、その場所はわからなかった。八一三年、パイヨという隠者が星の光に導かれ、野に埋もれていたヤコブの墓を発見し、その上に教会が建てられた。その後、増改築が繰り返され、ロマネスク建築の傑作と言われるようになった。それが、最果ての大聖堂、聖地サンティアゴ・デ・コンポステーラの大聖堂である。

サンティアゴはヤコブのスペイン語名。デ・コンポステラは星の野という意味で、この二つを合わせて「サンティアゴ・デ・コンポステラ」という聖地の名前が誕生した。

（最果ての彼方）
聖地は地理的には最果ての地にある。最果ては「終わり」を感じさせる。人間の死は終わりののだろうか。そうではなく、永遠の命、神の世界を説いたのが、イエス・キリストである。殺されても、聖書にある通り三日目に復活し、使徒たちはそれを見た。

最果ての大聖堂に眠るヤコブは、使徒の中で最初に殉教し、残る使徒も、ヨハネを除いて全員、殉教した。

「死で終わりではなく、永遠の命がある」。イエスの死と復活を体験していたからこそ、成しえたことであろう。

「地ここに果て、海始まる」の言葉通り、最果ては新たな始まりなのだ。

サビエルは、最果ての



聖ヤコブが眠るサンティアゴ大聖堂

ロカ岬近くのリスボン港からアフリカの最南端を経て、インドに向かった。最南端の地が「喜望峰」と名付けられたのがわかるような気がする。

スペインの北東端、ナバラ州の州都パンプローナで我々と別れ、徒歩で一カ月かけて聖地サンティアゴへ巡礼した山口教会の真鍋孝弘さん。「リュックの重さで肩の筋肉を傷めかけた」「高地を急いで歩いて酸欠状態になった」。この二回はダウンに近い状態になったが、外人巡礼者に助けられなんとか乗り切った。

聖地が見える歓喜の丘に着いた時は、歓喜というより、やっとだり着いたという気持ちだったと話す。

人はなぜ苦しい巡礼の旅に出るのだろうか。命を奪われても信仰を守り続けた殉教者たち。その聖なるものへの道は、巡礼者を浄化し、癒し、新しい生きる力を与えてくれるのではないだろうか。

聖地の人口はおよそ十三万人。この地を訪れる巡礼者、観光客は年間三百五十万人を超えるという。

今の日本、こうした聖なるものへの畏敬の念や信仰心が薄れ、命が軽んじられているように思えてならない。

（元山口放送取締役ラジオ局長）